



はじめに  
く町長挨拶く



## はじめに「町長挨拶」

浪江町長 馬場 有

### ◆町の一部避難指示解除を経て

平成29年3月31日に避難指示解除準備区域・居住制限区域の避難指示が解除になり、半年が過ぎようとしています。解除により、桜の時期や夏休みの時期等に、これまで立入りができなかった小さいお子さんたちが、祖父母の方に連れられて町の様子を見に来られているのを見かけるようになりました。こうした光景を目にすることができたことに、驚きと喜びを抱いたところです。

ただ残念なことに、この度の避難指示解除では、全町ではなく、面積で約8割を占める帰還困難区域を除いた一部の地域だけが解除となりました。それでもこの時期に避難指示解除に応じたのはいくつかの理由がありました。

一つは、除染等による放射線量の低減。そして、復旧作業を経て、最低限の生活環境は整備できたということ。ほかにも判断材料とした理由がありますが、もう一つは、人数としては少ないかもしれない町民の皆様の気持ちを大切にしたいと考えたことです。6年の歳月が経過した中で、皆様の心が折れてしまうことのないようにしたい、という想いがありました。

解除後、町に戻ってきた方からは、やっぱり浪江の空気が懐かしい、生まれ育ったところなので安心する、心がやわらぐ、という感想をいただいています。その一方で、震災前とは町の様子が全然違う、隣の人もいない、人と会話をすることが少なくなっているという不安な声も耳に届いています。医療面や買物の環境等を含め、生活する上ではまだまだ足りない部分があるのは事実です。

町では、復興を本格的に進めるため、たくさんの「希望の種」を蒔いてきました。それがいよいよ芽を出してくる時期に入ります。来年には、町の新しい復興の姿を町民の皆様にも実感していただけるよう見える化し、お示しできるようにしたいと考えています。

とはいえ、まだまだ多くの町民の皆様が、全国に分散して暮らしていらっしゃるのが現実です。

町は、一部避難指示が解除になったからといって、「すぐに帰ってきてください」ということを言うつもりはありません。帰れる方、帰りたい方が帰ってきていただけるように、そのための生活基盤をきちんと整備します、いつ帰ってきていただいても大丈夫な状態にします、という考えの下に復興に取り組んでいます。

いつかは町に戻りたいと考えていらっしゃる方でも、いろいろな事情ですぐには動けない方も多いかと思えます。お子さんが避難先の学校に通っていたり、避難先にかかりつけの医療機関があったり、仕事の関係もあるでしょう。浪江町は町民の皆様が暮らしていた思い出の地であり、先祖のお墓がある方もいらっしゃると思えます。避難先で生活を続ける中で、たまに浪江の空気を吸いに来る、浪江の復興の姿を見に来る、といったように、行き来しながら、いろいろな状況を踏まえて、戻れると判断されたときに、浪江に戻ってきてくださればいいと考えています。そのために町は、いつでも浪江に戻って来ることができる環境を準備しています。

## ◆7年目に入った『浪江のこころ通信』

平成23年7月の「広報なみえ」再開に合わせて掲載が始まった「浪江のこころ通信」も7年目に入りました。この冊子では、おおよそ4年目から6年目までの紙面を再録しています。この間、取材に応じていただいた町民の皆様、また、取材して記事を書いていたいただいた全国の取材協力者の皆様に、まず、お礼を申し上げます。

「浪江のこころ通信」が始まって2年目頃までは、懐かしい方がたくさん出てきて、浪江での日常生活や、浪江でやっていたこと、皆様やそのご家族が今どこで生活しているのかといったことを、興味を持って読んでいただいたことと思います。避難先で精一杯生活しながら、浪江のことを懐かしまれている、そういった内容が多かったと思っています。

その後、震災から4年目を迎える頃からは、町民の生活が、避難先で少しずつ定着していった状況が紙面から垣間見られるようになってきました。新しい場所での第二の人生をしっかりと踏み出していると感じられる記事もありましたし、一方で、なかなか避難先に落ち着けない不安な想いがひしひしと伝わってくるものもありました。

震災から6年を経て、この「浪江のこころ通信」という名前が表わすとおり、皆様一人一人の想いが紙面を通して伝わっていく、そういう大切なものになっていっていると感じています。このように長い間継続できているのは、大変貴重なことだと考えています。

これからは、この「浪江のこころ通信」が、どのように私たち

に共感を与えるものになっていくのか、個々人の心情が伝わり続けていくものとしていけるか、ということが大切になっていくと考えています。例えば、浪江町へ帰られた方のお話として、震災前とは全く状況が変わってしまった町の中で、不便さはあるがどのような想いで生活されているのか、といったことも伝わっているとよいと思っています。

## ◆本格的な復興に向けて

6年という年月の中には一言では言い尽くせないほど、いろいろなことがありました。今、ようやく町を元に戻していく「まちのこし」のスタートラインに立てたところだと思っています。

先日、浪江中学校の生徒が「ふるさとなみえ科」の授業で、震災後初めて浪江町に入られました。生徒の皆さんは、震災当時小学生でしたので、震災前のことはあまり覚えていないようですが、浪江のお祭りやショッピングセンターのことは記憶に残っているようでした。今回町を訪れ、町の現状を目の当たりにし、生徒たちも内心がっかりしていると思います。その気持ちを思うと、私も心が痛みます。生徒の皆さんにとっては、それでも浪江は故郷であると心の中のどこかにしみついているものだと思います。この子供たちが大人になり、町の復興に携わっていたら、こんなに有り難いことはないと思います。

町民の皆様、日々様々な想いを抱きながら、生活されていることと思います。頑張れと声を掛けられたとしても、もう頑張れねと言われてしまうかもしれません。ですが、もう少し踏ん張って



いただいて、新しい生活空間を作って欲しいと思っています。私も町を元の姿に戻していく決意を持ち続けます。町民の皆様もどうか健康にはくれぐれも留意いただき、お過ごしください。

震災直後、「明けない夜はない、必ず太陽は出てくる。それを信じて仕事をしていこう」と職員によく言っていました。今まさに、少しでも太陽が昇ってきたのが、かすかに見えてきたような状況になってきたところです。太陽が完全に輝く日が必ず来るのを信じて、皆様と共に歩んでいきたいと思っています。

(平成29年9月13日)